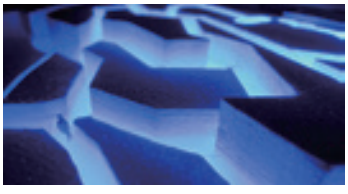
文化学園大学造形学部

年間教育活動報告集 2016

BUNKA ZOUKEI

BUNKA ZOUKEI



P1
造形学部プレゼンフォーラム

P7
学外連携　地域連携・産学連携

P13
卒業研究　優秀作品集

ご あ い さ つ

造形学部は、デザイン・造形学科と建築・インテリア学科の２学科で構成されており、生活に関わる情報やデザイン、住環境の領域で、創造性に富み、豊かで質の高い表現技術の習得に日々励んでおります。そしてそれらの教育成果を学内外に公表し評価いただく機会として、年間多くの教育事業を実施しております。たとえば両学科の専門性を駆使して、社会に貢献することを目指す「産学連携・地域連携型教育」や、学科・コースを超えて１つのテーマでモノづくりを競い合う「プレゼンフォーラム」などがあり、また４年間の教育成果発表の最大の機会である「卒業研究展」では、卒業生全員の作品や論文を４日間にわたり展示・開催しております。

この報告集は、これら年間を通しての多様な教育活動の中から、主だった活動を１冊にまとめたものです。広く皆様にこの報告集をご覧いただき、多くのご意見、ご感想をいただいて、本学部の新たな発展につなげてまいりたく存じます。

本学部の日ごろの教育事業にご協力いただいております多くの方々に御礼申し上げますとともに、今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

造形学部長　堀尾 眞紀子

デザイン・造形学科

本学科では、幅広いコースがそれぞれ専門性を深め、感性をはぐくみ、技術を磨いています。

社会と人々の生活を基盤としながら、視覚情報や生活用品、雑貨のデザイン、雑誌や書籍の編集制作、金属や七宝による造形表現、染めと織りによる作品制作、独創的なアート作品づくり、映像やアニメ作品制作など様々な取りくみを行っています。

平成 28 年度からは、よりデザインを中心とした新しいコース編成へと移行し、豊かな暮らしづくりへの提案を目指しています。

建築・インテリア学科

本学科では、広い視野と豊かな感性を養いながら、生活者の視点を重視したデザインの出来る人材の育成を目指しています。街づくりや生活の拠点となる集合住宅や独立住宅、ショップや各種施設、さらには空間を演出する家具・照明器具・インテリアファブリックまで幅広く扱い、コースに分かれて専門を深めながら合同のプロジェクトにも取り組みます。

平成 28 年度にはコース編成が新しくなり、ひとり一人の個性や感性を大切にしながら、幸せの空間づくりを目指します。

C o n t e n t s

造形学部プレゼンフォーラム	**1**	**卒業研究優秀作品**	**13**	インテリアデザインコース	**26**
学外連携	**7**	映像クリエイションコース	**14**	インテリアファブリックデザインコース	**28**
		グラフィック・プロダクトデザインコース	**16**	建築デザインコース	**30**
		メディア編集デザインコース	**18**	住生活デザインコース	**32**
		テキスタイルワークコース	**20**	学生の受賞	**34**
		ジュエリー・メタルワークコース	**22**		
		アートワークコース	**24**		

造形学部プレゼンフォーラム

主催　文化学園大学 造形学部
共催　株式会社オンリーワンクラブ

造形学部プレゼンフォーラムの意義

「造形学部プレゼンフォーラム」は 2005 年に文科省の特色ある教育プログラムの GP 特別企画として発足、その横軸連携型教育内容を造形学部の特徴と位置づけ、回を重ねてまいりました。生活に根ざしたモノづくりや、デザインの在り方を豊かな感性で追及する造形教育の成果として、学生が作品のプレゼンテーションを行い、学科・コースを超えて共有することで、各自が視野を広げ、自己を客観的に理解することを目的としています。また、教員間においても教育内容などを相互理解し、専門教育活動へ繋げています。運営には、毎年教員と学生で構成される委員会を立ち上げ、社会の変化に対応した企画を検討し行っています。今年も引続き株式会社オンリーワンクラブとのコラボレーションで開催しました。

デザインコンテストポスター

P r e s e n t a t i o n　F o r u m

作品テーマ
「くらしを豊かにするエクステリア」

■学生委員
司会：遠藤樹、川口藍　**記録**：笈川碧、芦野日菜
会場：栗田実憧、町田静香、榎本香穂奈、津田葵、石田佳澄、白石佳奈

■担当教員
委員長：嘉松聡　**副委員長**：安野彰、成井美穂
委員：近藤静香、松村由樹子、岩塚一恵

最優秀賞 村雨

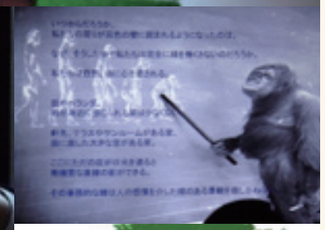
高橋 亜希子
［デザイン・造形学科3年　ジュエリー・メタルワークコース］

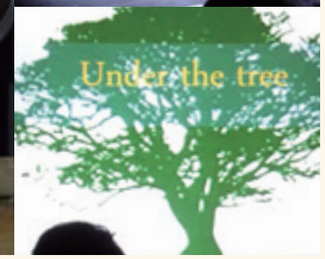
●本人メッセージ　日々の暮らしの中でふと思い付いたアイディアをここまで形に出来たことをとても嬉しく思います。プレゼンテーションの経験も乏しく、住宅模型を作ることも初めてであったため、何もかも手探りでの準備ではありましたが、多くの先生方と友人達に支えられ、何とか当日を迎えることができました。アイディアを産む苦労だけではなく、それを人に伝えることの大変さを学ばせて頂きました。

●コンセプト　「どこにでもあるようなもの」が小さなきっかけにより「ちょっと特別なもの」に変わる。そんな「驚き」や「変化」をコンセプトとしたエクステリアアイテムをデザインしました。また、あくまで私が提唱するのは“アイディア”とその“一例”であり、図案やタイルのサイズによってどんな場所にも使えうる、対象も場所も問わない無限の可能性を持ったものにしたいと考えました。

最優秀賞 Under the tree

飯野 万里穂
［建築・インテリア学科１年］



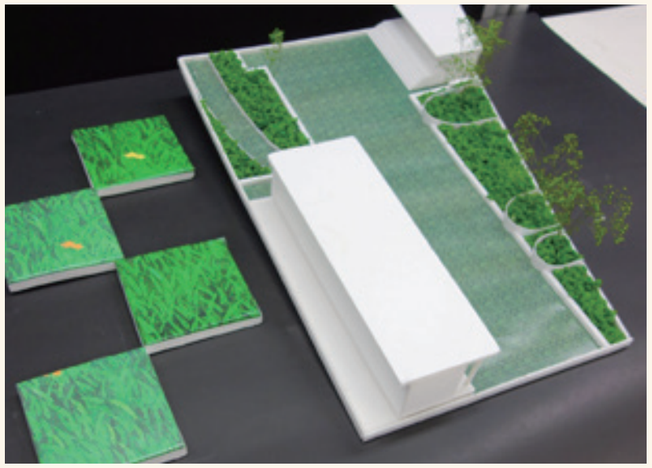


●本人メッセージ　自分の作品が評価されることに対してとても緊張したが、評価が低かったらどうしようと思うことは一切なく、仮に全く票が入らなかったとしても、私は後世に名を残すタイプかもしれないと思える自身のパーソナリティーと母が作る骨が残った適当な鮭おにぎりが大好きです。今回未熟な私の足りない面を補って頂いた方々への感謝とプレゼン前に友人からもらった差し入れのプリンの味は決して忘れない。そんなプリンのおいしさを後世にも伝えていきたい。

●コンセプト　庇の影が木陰になったら、そこにあるのは庇ではなく木があるような感覚になるのではないかと考えた。大きな木の下に鮭おにぎりを取りあう家族がいるイメージ。でも本当は最初からそう思いながら作ったわけではない。正直コンセプトなんて見た人が感じ取ってほしいけど、言葉にしておくと作品自体が良くみえる。自分でも改めてわかることがある。何か付け加えて言わなくても作品の優れているところは誰にでもわかるだろう。と最近まで思っていたが現実はそう甘くないようだ。

優秀賞 ゴミを捨てたくなくなるタイル

加藤 涼葉
［デザイン・造形学科２年］



●本人メッセージ　今回のプレゼンフォーラムで、様々な観点から考えることの大切さを学びました。審査員の方々にプレゼン終了後、沢山のご意見を頂き、業界の方々の考え方を知ることが出来ました。今後は今回の経験を生かし、様々なデザインコンテストや課題に取り組んでいきたいと思います。

●コンセプト　美しいだけのデザインではなく、エクステリアを通して皆がより良い生活を送れるものにしたいと思いました。その中で、ゴミのポイ捨て問題が改善されれば、皆が気持ち良く暮らせると考えました。自然の中でポイ捨てをする人は少ないのではと想像し、道路のタイルに自然を取り入れたエクステリアのデザインを発案しました。

優秀賞 2WAY CUBE

吉羽 南
［建築・インテリア学科１年］

●本人メッセージ　私は今回、初めてデザインコンペに応募しました。良いデザインを提案することと同じくらい、審査員や多くの人たちに自分の伝えたいことを的確に届けることは簡単ではなかったです。その一方、自分が思い描いたものを実際形にすることの楽しさも知れました。この経験を活力とし、より意欲的な学生生活を送りたいと思います。

●コンセプト　幼少期、綺麗な星空の下でハンモックに揺られたときの感動が忘れられず、この癒しを日常に取り入れたくてデザインしました。また、屋根付き物干し竿としても使えるのでお母さんの理解も得やすく、商品として購入してもらいやすいだろうと思います。癒しと実用性を兼ね合わせることで暮らしが豊かになると考えました。

モデル創りま賞 エナジーベジタブルズ

有馬 麻也香［生活造形学科４年　映像クリエイションコース］

●本人メッセージ　コンセプトは身近なあまり普段目につかないものを可愛く、目で見て幸せを感じ取れるようなもの造形したかったのでエナジーベジタブルという植物の栄養剤につけるカプセルを提案させていただきました。模型をつくったりと普段あまり出来ない体験をさせていただき楽しかったです。

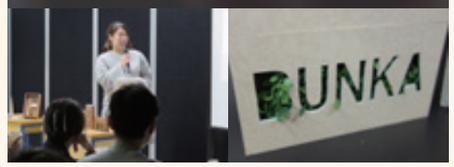
コンセプト賞 向き合うための虫かご

浪岡 拓也［建築・インテリア学科３年　建築デザインコース］

●本人メッセージ　昆虫から、生命の大切さと美しさ、そして強さを伝えたい。そのために昆虫を集める「自然装置」を考えました。プレゼンフォーラムで学んだことは、人に伝える、人に使って貰うということです。そんな単純で大事な要素を見逃していたことに気付かされました。今後はこの経験を活かし、人に伝わるデザインを考えて行きたいです。

もっと検賞 もりもり表札

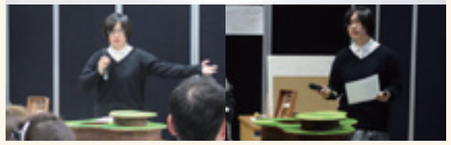
宮田 茉奈［建築・インテリア学科２年　インテリアデザインコース］



●本人メッセージ　自分の作品を言葉で伝えることの難しさに加え、商品化するには、アイデアやデザインそのもの以外にも、湿気やカビなどの実際面について考えなければいけないことを学びました。今後は今回学んだことを生かして、物事をより深く考えてデザインしていこうと思いました。

初志貫徹しま賞 グリーン・ガーデニングテーブル

森山 えりか［デザイン・造形学科２年］



●本人メッセージ　誰も考えた事のないような新しいインパクトのある発想と、実用性が必要であると思い、様々なアイデアを考えました。しかし、完璧なモノを作り上げるのは困難で、今は自分の発想を上手くまとめて収束させることが、第一の課題であると学ぶことができました。この経験を活かして今後もデザインしていけたらと思います。

特別賞

「umbrella-stand」笈川碧［デザイン・造形学科１年］
「日本の心―竹アーチ―」榎本香穂奈［デザイン・造形学科３年ジュエリー・メタルワークコース］
ポストに置くだけ！「郵便物お知らせ係」白石佳奈［デザイン・造形学科３年ジュエリー・メタルワークコース］
「rain」栗田実憧［デザイン・造形学科３年ジュエリー・メタルワークコース］
「スプリングじらー」町田静香［デザイン・造形学科３年ジュエリー・メタルワークコース］
「ブラインド風フェンス」遠藤樹［生活造形学科４年テキスタイルワークコース］
「Wall & Chair」津田葵［建築・インテリア学科１年］
「収納ドア」石田佳澄［建築・インテリア学科２年インテリアデザインコース］
「花咲く立水栓」川口藍［建築・インテリア学科２年インテリアデザインコース］
「組み変えパネル式庇」芦野日菜［建築・インテリア学科２年インテリアデザインコース］

審査員のコメント

２回目となる今回は、提案も実現の可能性を感じるものが増えたと思います。社会的な問題を解決する意欲的な提案や空間を積極的に楽しむ提案を私たちは評価しました。ただ、最終プレゼンに到るまでに思考変化もあったようで、提案が更によくなるものと逆につまらなくなってしまった印象を受けるものがありました。独自性を持ち、様々な価値観の評価を受けながら、提案の向上をしてもらいたいと思います。（オンリーワンクラブ 杉原広宣）

表彰式

審査員

審査委員長
井上 揺子［教授 / 文化学園大学インテリアデザイン研究室］
審査委員
目賀 正［株式会社オンリーワンクラブ］
杉原 広宣［株式会社オンリーワンクラブ］
早川 貴章［C.H.O.design 代表 / プロダクトデザイナー / 文化学園大学非常勤講師］
岡部 タカノブ［准教授 / 文化学園大学メディア・映像研究室］
谷口 久美子［准教授 / 文化学園大学住生活デザイン研究室］

審査総括　今年も最終審査に残った作品は、それぞれに気の利いたアイデアを時間かけて真摯に考察し、作り込んできたものばかりで、気持ち良く審査することができました。審査は公開形式にして、和気藹々とした雰囲気で進みましたので、審査員たちがどこがぐっときたか、どこが残念だと感じたか、制作した学生たちに細やかに伝えられたのではないかと思います。これからも、ものづくりに対する誠実な気持ちを持ち続けてもらいたいと願っています。（審査委員長　井上揺子）

昨年度受賞作品の商品化が決定　『アンブレラフック トランプ』

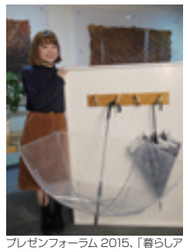
昨年度「暮らしアイデア賞」を受賞した茂木沙織さんの提案したデザインが、協賛企業である（株）オンリーワンクラブの商品として販売される事が決定し、商品カタログに掲載される事になりました。造形学部プレゼンフォーラム・デザインコンテストと実社会がつながった、たいへん意義のある喜ばしい結果となりました。

コンテスト応募用紙での提案内容

初回試作

塗装前

塗装後


プレゼンフォーラム 2015、「暮らしアイデア賞」を受賞した時の茂木さん

完成商品。商品名は『アンブレラフック トランプ』

茂木沙織
（生活造形学科４年
ジュエリー・メタルワークコース）

コメント　商品化が決まり、打ち合わせを重ね商品の写真を見て実感がわきました。自分の頭の中で考えていたものを実際に商品になるという貴重な経験をさせて頂き、とても嬉しい気持ちと共に、使い易さやデザイン性をもって販売する事を考えなければならない難しさを感じました。この経験を無駄にしないよう、社会で活かしていきたいです。

学外連携

地域社会とのつながりや産業界との共同活動など、学外との連携も大学の重要な社会的役割です。地域社会に息づく文化や産業を活性化する作業を通じ、大学で学んでいる知識を実践する活動は学生の社会的視野を拡大してくれます。また、産業界とのコラボレーションは、実社会で必要とされる多岐にわたる社会的配慮や、コミュニケーションの重要性を肌で学ぶ絶好の機会です。今年度実施したさまざまな学外連携活動を以下に報告します。

External Cooperation

● 地域連携　Regional Alliances

01　二子玉川を映画の町に［メディア・映像研究室・昼間他］
02　多摩産材を活用した家具・インテリア小物のデザインと制作［インテリアデザイン研究室・丸茂他］
03　新宿芸術天国・ファッションステージ［染織研究室・佐藤他］
04「染の小道」［染織研究室・佐藤他］
05　長野県須坂市における古民家再生プロジェクト［建築デザイン研究室・井上他］

● 産学連携　Academia-Industry Cooperation

06「３つのカタチ」展示会［インテリアデザイン研究室・丸茂他］
07　子どもたちが映像で遊ぶイベント企画［メディア・映像研究室・昼間他］
08　レオパレス21 ×リリカラとのコラボ企画［住生活デザイン研究室・浅沼他］
09　デコブラインドコンテスト（株式会社ニチベイとの連携授業）［インテリアデザイン研究室・長山他］
10　東京の木「多摩産材」を広める活動［インテリアデザイン研究室・丸茂他］
11　小田急フリーペーパー［メディア・映像研究室・牧野他］
12　ロッテ商品 CM 制作［グラフィック・プロダクト研究室・松本他］
13　ヤマヒサと顧客をつなぐアイテム提案［グラフィック・プロダクト研究室・星野他］
14　造形学部の卒業生たちの活躍を誌上で紹介！［メディア・映像研究室・堀尾他］
15　小田急トレインテリア（小田急電鉄との連携授業）［インテリアデザイン研究室・長山他］
16「絆ジュエリー展 2016」のためのジュエリー制作［金工研究室・庄司他］
17　ネクタイコラボレーション展（東京ネクタイ協同組合との連携授業）［染織研究室・佐藤他］

01 二子玉川を映画の町に！

⊙担当教員
メディア・映像研究室　昼間行雄
⊙取り組んだ学生
生活造形学科　映像クリエイションコース　4年

国際映画祭の PR 映像を制作

11 月に世田谷区二子玉川の itscom ホールと東急シネマズの映画館で開催された「キネコ国際映画祭 2016 & TIFF（共催：東京国際映画祭）」。その映画祭キャラクターが登場する映画館上映用 PR 映像と PR 用大型パネルを制作。また映画祭期間中、セレモニーや上映会場等をビデオ取材し、記録映像を制作しました。

02 東京の森を活かします！

⊙担当教員　インテリアデザイン研究室
丸茂みゆき・曽根里子・菊池光義（非常勤講師）

⊙取り組んだ学生
建築・インテリア学科　インテリアデザインコース、インテリアファブリックコース　4 年生

多摩産材を活用した家具・インテリア小物のデザインと制作

秋川木材協同組合との 7 年目の企画です。東京の木 "多摩産材" は良質で循環型エコ材料として高い評価を得ていますが一般には知られていません。学生達若い世代が資源の活用や地産地消の大切さを理解するために、現地見学し、杉・桧を活用した実物を作っています。

03 新宿芸術天国、ファッションステージに参加

⊙担当教員　染織研究室
佐藤百合子、岡本泰子、近藤静香
メディア・映像研究室 昼間行雄（撮影）

⊙取り組んだ学生
デザイン・造形学科有志、卒業生
服装造形学科有志

新宿芸術天国・ファッションステージ

新宿駅周辺の魅力をアピールするイベント「新宿芸術天国」。パスタ新宿に設けられた野外ステージで「服の力」がテーマの服装学部のショーと共にテキスタイルワークコース制作の着物シーンで斬新で華麗な着物スタイルを披露しました。

04 今年も参加！染物で街を元気にする「染の小道」

⊙担当教員　染織研究室
佐藤百合子、岡本泰子、近藤静香、角谷彩子
メディア・映像研究室 昼間行雄（撮影）

⊙取り組んだ学生
デザイン・造形学科テキスタイルワークコース3、4年
（暖簾制作、作品展示、ワークショップ等）
デザイン造形学科有志（モデルボランティアスタッフ）

新宿区中井・落合「染の小道」

染色の街を染色の力で元気にするイベント「染の小道」。テキスタイルワークコースでは街の暖簾制作や学生の作品展という形で参加しています。作品展の会場で地元紅型工房と共に行っている、学生制作の着物ファッションショーも大好評でした。

05 日本の伝統建築で地元民と共に過ごし、未来を視る

⊙担当教員
井上摂子（建築デザイン研究室）、渡邉裕子（建築デザイン研究室）、
高橋正樹（インテリアデザイン研究室）、牧野昇（メディア・映像研究室）、
佐藤百合子（染織研究室）、伊藤丙雄（東京工科大学）

⊙取り組んだ学生
造形学部 1～4 年生、
東京工科大学デザイン学科
2～4 年生　計 19 名

長野県須坂市における古民家再生プロジェクト

夏休み合宿で、昨年拡張した台所の壁にモザイクタイルと杉板を張る改修作業、続いて大人対象（約 15 名）型染めランチョンマットと地元木材で焼杉プレートやカトラリーを作るワークショップ。地元に知られてきた当プロジェクトをより地元に馴染むものにしたいという話し合いも始めました。

06「3つのカタチ」展示会

⊙担当教員　インテリアデザイン研究室
丸茂みゆき・曽根里子・菊池光義
グラフィック・プロダクト研究室
星野茂樹・白井信・山崎裕子　メディア・映像研究室　堀尾眞紀子・牧野昇・岡部隆信・森啓次郎・岡崎成美・深田雅子

⊙取り組んだ学生
建築・インテリア学科　インテリアデザインコース、インテリアファブリックコース　4年生
デザイン・造形学科　グラフィック・プロダクトデザインコース4年、メディア編集デザインコース3年

企業連携企画の3コースが、成果を学内に合同展示

㈱ヤマヒサとの連携企画を実施した3コースの成果を大学内で合同展示。企業のテーマに即した、木製家具・インテリア小物の制作、ノベルティーの提案、広報誌の掲載記事作成など、企業と一緒だからこそ経験できたデザイン・制作活動の成果を広く紹介した。

07 子どもたちが映像で遊ぶイベント企画を実施

⊙担当教員　メディア・映像研究室
昼間行雄、荒井知恵

⊙取り組んだ学生
生活造形学科　映像クリエイションコース　4年

合成映像インスタレーションを考案

名古屋市主催のアート・イベント「金山ぐるりタイムトンネル」展示物企画コンペによって採択された学生2名の案を元にインスタレーション一式を制作。その展示エリアで、来場した子どもたちがヒーローに変身してエイリアンの UFO と戦う参加型映像イベントを行ないました。

08 東京の地で●●文化を感じる空間を創る

⊙担当教員　住生活デザイン研究室
浅沼由紀・久木章江

⊙取り組んだ学生
建築・インテリア学科　住生活デザインコース　3年生（「住生活デザイン演習ⅡB」科目履修者）と2年生（有志）

関連記事掲載：http://www.leopalace21.com/gakupalace/kanto/bunka.html

レオパレス 21 ×リリカラとのコラボ企画

㈱レオパレス 21 の部屋を、リリカラ㈱の内装材を使ってデザイン。関係2社と一般による審査投票で最優秀賞に選ばれたのは小柏美月さんの「wa-room」。この作品は実際にレオパレスのモデルルームに施工、業者の方との念入りな打合せを経て、皆で協力して部屋の装飾を完成させました。㈱レオパレス 21 の web サイト「学パレス」に関連記事掲載。

09 ブラインドをデコレーションして空間を演出

⊙担当教員　インテリアデザイン研究室
長山洋子
⊙連携先　（株）ニチベイ

⊙取り組んだ学生　建築・インテリア学科
インテリアデザインコース　2年

関連記事掲載：http://www.nichi-bei.co.jp/jsp/decoblind-compe/

個性的な空間を創り出すデコブラインドコンテストに参加

2016 年コンテストでは、内藤嵩道さんが最優秀賞、採光量の少ない窓に海底に差し込むわずかな光を演出した「海底に住む」が評価されました。インテリアビジネスニュース誌の特別賞は芦野日菜さん、テーマは「百鬼夜行」で独自の世界観を表現したところが評価されました。

10 東京の木「多摩産材」を広める

⊙担当教員　インテリアデザイン研究室
丸茂みゆき・曽根里子・菊池光義（非常勤講師）

⊙取り組んだ学生
建築・インテリア学科　インテリアデザインコース、インテリアファブリックコース　4年生

住宅ショールームでの展示会

地域連携「多摩産材」での制作は、住宅メーカー㈱ヤマヒサ様からテーマが提示されます。完成作品はヤマヒサの新宿と目黒2か所のショールームで合計3か月間展示し、「住宅に多摩産材を使いたい」と感じてもらえる様に紹介する活動をしています。

11 “きらり”と光る、街の魅力を紹介!!

⊙担当教員
牧野昇、岡部隆信、平島毅、深田雅子

⊙取り組んだ学生
メディア編集デザインコース 4 年生

小田急フリーペーパー

小田急電鉄と連携してフリーペーパーを制作しました。「代々木上原」、「下北沢」、「経堂」の3つのエリアの取り上げ、それぞれの街のきらりと光る魅力を紹介。完成した 3 つのPR紙は8月より小田急主要駅やHPを通じ、およそ2万部が無料配布されました。

12 ロッテ商品開発部にコマーシャル映像を提案

⊙担当教員
グラフィック・プロダクト研究室　松本 章（非常勤講師）

⊙取り組んだ学生
グラフィック・プロダクトデザインコース　3年

ロッテ塩キャラメルの CM 制作

グラフィック・プロダクトデザインコースでは毎年（株）ロッテと産学連携コラボ授業を行なっています。今年の課題は「塩キャラメル」。商品の魅力をいかに伝えるか。学生たちが5つのグループに分かれ CM 制作に挑戦しました。最優秀作品にはロッテさんから豪華な景品が贈られました。

13 ブランドピーアールのデザイン

⊙担当教員　グラフィック・プロダクト研究室
星野茂樹　白井 信　山崎裕子

⊙取り組んだ学生
グラフィック・プロダクトデザインコース　4 年

ヤマヒサと顧客をつなぐアイテム提案

外部企業と連携をとりながら実社会におけるデザイン提案を行なう体験型授業。今回のテーマは（株）ヤマヒサのブランド力を高め、顧客との関係をより良いものにするためのノベルティーの提案です。4 つのグループに分かれ、調査・立案・モデル制作まで、数回のプレゼンテーションを経て最終提案を行ないました。

14 卒業生たちの活躍を誌上で紹介!

⊙担当教員
堀尾眞紀子、牧野昇、岡部隆信、深田雅子、岡崎成美

⊙取り組んだ学生
メディア編集デザインコース 3 年生

ヤマヒサの広報誌の誌面制作

メディア編集デザインコースでは、造形学部の卒業生たちの活躍を紹介する雑誌制作の課題を再編集（取材文、写真、レイアウト等）し、株式会社ヤマヒサが発刊する季刊広報誌『Las caracol（カラコル）』誌上で紹介しました。

15 トレインテリア

⊙担当教員　インテリアデザイン研究室
長山洋子、高橋正樹

⊙取り組んだ学生　建築・インテリア学科、インテリアデザインコース 1 クラス　3年生

小田急トレインテリア

電車車両のデザイン「トレインテリア」を大学生目線でリノベーション。通勤型車両の魅力向上をテーマに 10 班に分かれて企画・デザイン・提案を行いました。今年のお題は「通勤・通学時間を気持ちよく、居心地よく」。最優秀作品、優秀作品には、小田急電鉄さんから豪華賞品が贈られました。

16「絆ジュエリー展 2016 年」開催

⊙担当教員　金工研究室
庄司喜久美、押山元子、
春田幸彦、成井美穂

⊙取り組んだ学生
造形学部　デザイン・造形学科　1~3年
建築・インテリア学科　1~3年
現代文化学部　国際ファッション文化学科　1~3年

東日本大震災復興支援「絆ジュエリー展 2016 年」を開催

2030 年まで子供達の支援を目的とする「NPO 法人絆プロジェクト 2030」とアートクレイシルバーを開発した「相田化学工業株式会社」とのコラボレーションで継続しています。第6回は「再生」をテーマに制作し、多くの賞が贈られました。

17 ネクタイに学生の自由な発想を!

⊙担当教員　染織研究室
佐藤百合子、岡本泰子、近藤静香、角谷彩子

⊙取り組んだ学生
テキスタイルワークコース　3~4年生
ソフトマテリアル履修者

「ネクタイコラボレーション展」を開催

毎年東京ネクタイ協同組合と本学が共催している「ネクタイコラボレーション展。今年のテーマは東京オリンピック各国ユニホーム(デザイン部門)、未来の都市(染タイ部門)、ジャパンカルチャーアピール(デコタイ部門)。各部門で学生の作品が競われました。

●その他の活動

新宿大ガード「ウォールギャラリー」

新宿大ガードの「ウォールギャラリー・大ガード」に落書き防止対策として5年間作品展示

会期:2016 年 10 月 12 日~ 2021 年 3 月 31 日
場所:「ウォールギャラリー・大ガード」
(JR新宿駅北側 JR大ガード)

新宿警察署より依頼を受け、新宿区、歌舞伎町タウン・マネージメントと協力して造形学部の在学生および卒業生が落書き防止対策として原画作品制作を行い 2016 年 10 月にオープンセレモニーが行われ一般公開されました。
この壁画設置は、2011 年より行われ、2013,14 年に新宿警察署から「防犯功労」で表彰された実績もある環境浄化プロジェクトの一環で、この度劣化等の理由からリニューアルされた絵画は、一層にぎわった街をイメージした「新宿の未来」をテーマに、縦 150 ×横 85(cm) サイズ 20 枚の作品で構成されています。その原画は応募のあった作品より厳選されたもので、油彩、水彩、アクリル絵具、色鉛筆、CG以外にも、型染めなどさまざまな画材技法により表現されています。

インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル (ICAF)

ICAF 2016 で映像クリエイションコースの作品を上映

会期:2016 年 9 月 22 日~ 25 日
会場:国立新美術館大ホール

大学や専門学校の学生が制作したアニメ作品上映イベント「インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル 2016」(主催:ICAF 実行委員会)で、映像クリエイションコース 3 年生、4 年生の課題作品、個人作品、計 8 作品が上映されました。瀬沼美幸さん(4 年生)のCG作品『ローリング』は、参加した 28 校から 1 本ずつ選抜される作品として選ばれ、金沢 21 世紀美術館、愛知芸術文化センターなど全国 7 か所で巡回上映されました。
ICAFホームページ　http://www.icaf.info/

卒業研究 優秀作品集

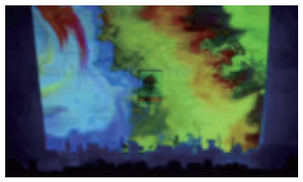
Excellent anthology

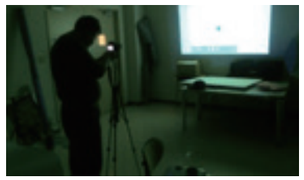
Pamper's

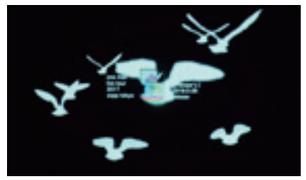
ミュージックビデオ、CM（動画映像データ）13分、ホームページデータ、フライヤー等のグッズ

倉持 竜志　QuickTime 1920 × 1080 ピクセル

AWARDS 学長賞







解 説

インディーズ・バンド Pamper's のプロデュースとして、効果的な宣伝やトータルなデザインを研究し、ミュージックビデオ（MV）、ホームページ、グッズ、フライヤーなどを制作した。ミュージックビデオは、プリントアウトに加工したアニメーションやプロジェクションなどのいろいろな技法を使い、アナログ感のあるものに仕上げた。ホームページは、グッズ、ミュージックビデオ、フライヤーの素材データを生かした構成とした。

プロセス

MV は、4 月に企画立案し、5 月から絵コンテの制作、6 月以降にビデオコンテを作成、10 月から撮影に入り、タイトル制作、編集を経て 12 月に動画データが完成した。［スタッフ］脚本、監督、撮影、照明、録音：倉持竜志［キャスト］倉持竜志、家令稀帆。グッズ、ホームページ等は 6 月から取組み 12 月に完成。バンドのプロデュースでの多くの工程では、スタッフの意思の疎通がとても大切だということが分かった。

講 評

インディーズ・バンドの宣伝戦略について、商業的に行なわれている様々な方法を調べ、それを全て自身で行なっていくためにトータルなデザインを多角的に研究した成果が現れている。実写の映像を 1 フレームずつプリントアウトし、それに手描きのアニメーションを加えたり、その映像を大きく白壁に映写してキャストと合成するといったアナログ的な技術をデジタル映像に上手に融合させているミュージックビデオの構成が独創的である。

Natalie Emmons MV Project

ミュージックビデオ（動画映像データ）8分

家令 稀帆　QuickTime 1920 × 1080 ピクセル

解 説

海外のインディーズのアーティストに曲の提供を依頼して制作したミュージックビデオ。90 年代のアメリカンファッションを取り入れたデザインを元に衣装や小道具を揃え、ショッピングモールに交渉して店内や屋外を借りてロケを行なった。実写をベースに Photoshop で描いたアニメーションも使用。さらに本編に加えて、メイキングビデオやスポット CM、CD ジャケットの制作を行なった。

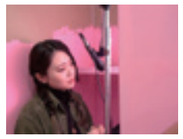
沁みる

実験映像（動画映像データ）4 分

工藤 杏美　QuickTime 1920 × 1080 ピクセル

解 説

［スタッフ］脚本、撮影、編集：工藤杏美、撮影助手：大久保葉月、尾坂日向子、沼田瑞希
［キャスト］主人公:吉永藍、ナレーション:深澤百合亜。映像を見慣れている世代も驚くような映像美の追求を研究した。実写にアニメーションと特殊効果を交えて構成し、より幻想的に見えるよう編集ソフトのビデオエフェクトを活用。主に揺れを軽減するワープスタビライザーと滑らかなスロー映像に変換するオプティカルフローを用いた。



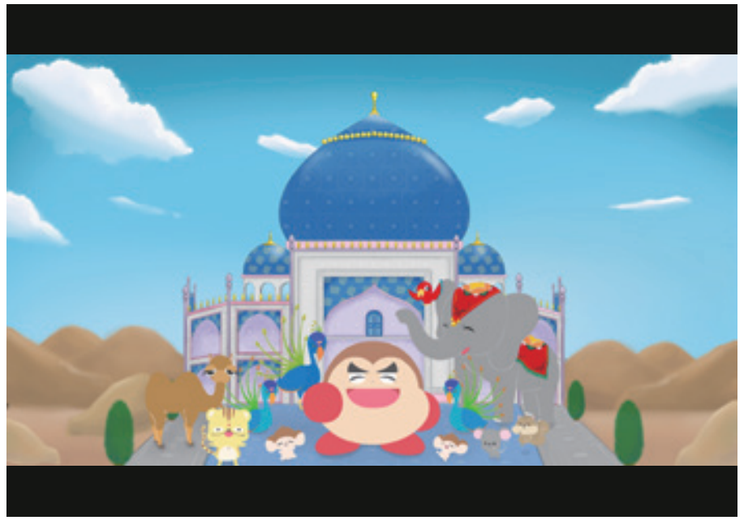
サルマゲドン～インドへ行く～

2D アニメーション（動画映像データ）5 分

村岡 茉莉　QuickTime 1920 × 1080 ピクセル

解 説

テレビ・アニメーションの構成と技術、さらに魅力的なキャラクター作りを研究した。オリジナル・キャラクターを作成し、それがより魅力的に見えるよう、重点的に目元に表情をつけた。主人公たちがインドへ行くストーリーとし、インドのデザイン、色彩、音楽などを追究して世界観を構築。作画は全て Photoshop で行い、編集は After Effects、音響のミックスは Premiere Pro で行った。



言葉を彩る

気持ちを伝えるタイポグラフィ

大野 友菜

・心のデザイン （メッセージカード）
・日常発見のデザイン （おのまとべ／冊子）
・遊びのデザイン （言葉あそび／蛇腹本［箱収納］）

AWARDS 学長賞

解 説

文字にイメージしたカタチを纏わせ、言葉を彩るタイポグラフィ。それは「読む」ということにプラスして「見て感じる」という点に於いて無限の可能性がある。生活と一体化している「言葉や文字」ならではの面白さや奥深さ、隠れたユーモアなどを引き出せるよう意識し、心のデザイン·日常発見のデザイン·遊びのデザインの3つのカテゴリーに絞り制作を行った。日々の生活に新しい発見や楽しさを見つけるきっかけになってほしいと願った。

プロセス

帰り道や電車の中など日常を過ごすなかで、テーマを常に意識しながら小さな発見も書き留めていった。そうすることでアイデアが浮かび、制作に対する意欲も高まった。言葉の意味や響き、文字のカタチなど、そのひとつ一つをデザインの要素として取り入れ、色のバランスや文字のディテール、文字に合うビジュアルづくりなど、妥協しないように制作していった。とことん突き詰めることでイメージしたものがカタチになる喜びを実感できた。

講 評

この作品には、普段、なにげなく使われている言葉や文字を作者の視点で咀嚼し、イラストや文様、写真などと併せて、受け手側を引き込んでいく魅力がある。言葉の響きや軽快なリズム、それらが持つ空気感、気持ちを伝えるための動きある仕掛けなど、言葉と文字の関係を、作者のユニークな発想で3種類のスタイルに作り上げている。「言葉を自由に創造する」という、若い感覚世代ならではの心地よさが印象的な作品である。

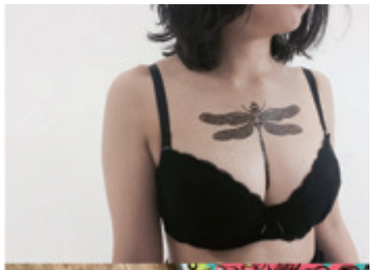
グラフィカル アート

共生　―私と生きる柄―

梅原 雅

解 説

幼い頃から絵を描くことが大好きで、机の上にある様々な画材たちはずっと私を支えてきてくれた。絵を描くことは私にとって、なくてはならない存在であり、密接な関係を持って一緒に生きている。制作した作品集は「縁（えにし）」「息吹（いぶき）」「循環（めぐり）」「色（いろ）節（ふし）」という4つのテーマを設け、絵柄を展開した写真を取り入れたり、パターン化して飽きがこないように工夫しながら、編集から製本まで全て自分で行った。



日本の遊びを楽しむ雑貨

黒木 麻衣

解 説

昔からある「日本の遊び」にはゲームとしての楽しさと共に日本人らしい教養やユーモアを感じさせるものなど、日本文化に根付いた奥深さある。若い世代や海外の方にもっと手軽に日本の遊びの色褪せない面白さを知ってもらいたいと思い、今回「日本の遊び×食卓」をテーマに雑貨や食品パッケージなど6種類の提案を行った。この作品を使う人が日本の遊び、引いては日本文化の魅力の一端を身近に感じてもらえたら嬉しい。

壁掛けからくり忍者屋敷

小池 美緒

解 説

からくり屋敷という日本特有のおもしろい建造物をもっと色々な国の人に知ってほしいと考え、今回の研究題目に決定した。制作したのは、壁に掛けて飾れるミニチュアからくり忍者屋敷４点。１点につき１つ仕掛けがあり、仕掛けを解くと現れる忍者フィギュアは、取り外して別の場所で飾る事ができる。壁や床、小物等は本物に近い質感の素材を使用する事で、屋敷の中に迷い込んだ気分でからくりを体験できるように工夫をした。

叙情絶佳（じょじょうぜっか）

林 冴香

くるみ製本（無線綴じ・ソフトカバー）、ジャケットあり
240mm × 185mm

AWARDS 学長賞

解 説

私たちは、日々過ごす中で漢字に触れないときはなく、漢字には１つ１つ意味や歴史があります。最近はスマートフォンの普及で、自分で文字を書く機会が少なくなってきたこともあり、言葉や文字への意識が低くなっているように思います。そこで現在の漢字のルーツでもある象形文字に注目し、象形文字のデザイン的な面白さを現在のファッションやライフスタイルの写真と組み合わせ、そこに自分の言葉を添えた本を制作しました。さらにそのイメージを追求した映像作品を収めた DVD も巻末に収めています。

プロセス

撮影はそれぞれにコンセプトを決め、友人にモデルやヘアメイクをお願いし、スタジオなどで撮影しました。また、撮影と並行して詩を書き、それをベースに写真や漢字をセレクトし、全部で 50 の「象形文字」を厳選しました。素材が揃ってからは１つの漢字に対して何回もデザインを見直しながら納得できるまで編集作業を行い、製本に関しても何度か見本誌を制作し、本になった状態でチェックをして、ページの順序など再確認しました。

講 評

漢字のルーツである「象形文字」のその独特なカタチが、現代のデザインやファッションと融合しても充分に通用する、という作者の独創的な着眼点から本書の制作は始まった。作者のほとばしる制作意欲と情熱は、書籍制作の枠をも一気に飛び出し、映像作品までにも及んだ。まさに４年間の大学生活の中で修得した企画力、編集力、デザイン力、さらに大学で培った人間関係などの全てがここに集約し、まさに「集大成」と呼べる作品となった。

はんどめいこ

羊毛フェルトと街に出る

大須賀 明子

くるみ製本（無線綴じ・ソフトカバー）、ジャケットあり 200 mm× 200 mm

解 説

ふわふわ、もふもふ。暖かくて、優しい。そんな羊毛フェルトで作られた仲間たちが、もしもあなたの街に溶け込んでいたら。羊毛フェルトの作品を単純に撮影するのではなく、羊毛フェルトで作られた世界と私たちの日常の現実の世界が融合しているかのような写真を撮影しました。写真に合わせてシャレを効かせた一言も添えています。作品の作り方や道具の説明などは入れず、見た人がほっこりできる、まるで絵本のような暖かみのある写真集です。

Kusoneko

引き取った猫とその家族について

柏田 有琴

くるみ製本（無線綴じ・ソフトカバー）
257mm × 172mm

解 説

父親に怯えて生活してきました。些細なことで罵倒され、何回も泣かされました。小さい時は優しくて面白かった父が、何かに取り憑かれたかのように怒るようになってしまったのです。猫の手も借りたいという思いで五年前から猫を飼い始めました。やがてモラルハラスメントが父をそうさせていると分かり、家族が変わっていきます。この本は五年前から今までのことがまとめてあります。家族で悩んでいる人に手に取ってもらいたいです。

たなか家

田中 由樹

ハードカバー
200mm × 210mm

解 説

ある日ふと、家族と過ごせる時間はいつまで続くのだろうと思った。お父さん、お母さん、私に妹の４人家族。この家族４人での時間は永遠には続かない。私たちが思っているよりも家族と過ごす時間は少ない。それに気づいた時、家族と過ごす時間が「かけがえのないもの」に感じた。お父さんの仕事の都合でいろんな国に住んだ。たくさんの家に住んだ。人よりも家族と一緒にいる時間は長かった。22年間の家族との思い出を一冊の本にした。

forest

自然を感じるテキスタイル提案

土屋 咲央里

シルクスクリーン、刺繍・綿、麻
1000 × 3000 × 4000mm

AWARDS 学長賞

解 説

スクリーン捺染を学ぶ中で、自分の好きなモチーフや色などとの相性が合うのはこの技法だと感じた。それを追究したいという気持ちと、活かした物づくりがしたいと考えるようになった頃、北欧の文化に出会った。暮らしをテキスタイルで豊かにするという発想に共感を覚えながらも、更に身近にできる提案が出来ないかと考え、日傘制作をする事に決めた。刺し子や刺繍を取り入れることで、新しい表現に挑戦するという思いで制作に取り組んだ。

プロセス

スクリーン捺染には顔料と染料を使い分け、生まれるプリントに違いが出るようにした。生地は「シルクスクリーン」「傘の縫製」「刺繍」に適したものを考慮し、麻スラブ、綿ブロード、綿サテンを使用した。デザインは自然の自由なイメージを表現するために手描きにこだわった。日本古来の手芸の技法である刺し子やビーズ刺繍を取り入れることで、新しい日傘の提案が出来たと思う。傘の縫製も自ら研究し、丁寧に縫上げた。

講 評

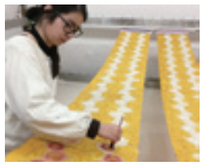
作者は、明るくおおらかな表現が多い北欧のテキスタイルに興味を持ち、日傘という一定の制約のある形の中に多様な表現を試みた。放射状にはぎ合わせたリズムをデザインの中に巧みに取り入れている。抽象具象取り混ぜたシルクスクリーンプリントの上に施した刺繍や箔などの装飾は手仕事の温もりを感じ、形に深みを増している。多くの色や表現を使いながら全体の統一感を失わないのは、根底にある自然への慈しみだろうか。

青海波と牡丹唐草

和と洋の古典文様をアレンジした和服制作

谷川 茉里奈

浸染、刷毛染・綿、絹
1800 × 1800 × 100mm　他



解 説

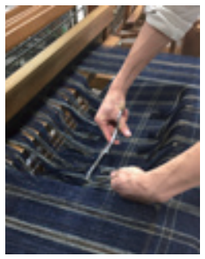
オリジナルな柄の作品を制作して行くうちに古典文様に興味を持ち、古典文様をアレンジした和服制作をしたいと考えられるようになった。青海波がテーマの着物は、青海波とイタリア、ピサのロマネスク様式の建造物に使われている半円アーチとの類似性に着目したデザインにした。技法は刷毛染、生地は絹を使用した。牡丹唐草の浴衣は、牡丹や唐草の古典的モチーフを自分なりにアレンジした。技法は、藍色の浴衣が浸染、山吹色の浴衣を刷毛染で制作した。

MYSELF

手織生地でのセットアップと小物の提案

遠藤 樹

綾織・服地用紡毛単糸
制作生地…820 × 13000mm、
（セットアップ…1750 × 500 × 250mm）
（展示生地…820 × 4000mm）



解 説

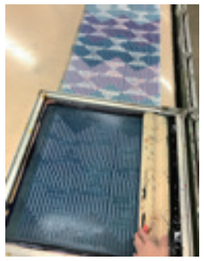
私が幼い頃から憧れていた手仕事をテーマに手織でツイード服地を制作し、セットアップと小物を制作した。柄は自身の学生生活を振り返った時のイメージカラーでデザインし、手織らしい生地の風合いを意識して織った。生地の完成後、セットアップはテーラーにて、小物は手作業にて形にした。制作を通して、初めて手織を経験した瞬間から感じていた手仕事への魅力を改めて実感し、それを卒業後にも活かすことを目標に挑んだ。

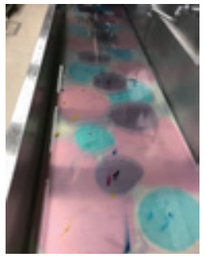
WA

新しい「和」スタイルの考察と制作

齊藤 星奈

シルクスクリーンプリント、浸染、
マーブリング・綿、ポリエステル
1600 × 1000 × 500mm





解 説

和服を生活に取り入れたいが、手が出しにくいと悩んでいる人たちの為に、今回新しい「和」スタイルをテーマに制作した。浴衣は、あえて冬にちなんだ雪の結晶をモチーフに使う事で視覚からも涼しげな印象を与えられると考え、抽象化して表現した。オクラ柄の和風セットアップは、夏が旬のオクラの輪切りをモチーフに手作りならではのやわらかい印象が表現できるよう型染技法で取り組んだ。

雨が伝う 風が撫ぜる

鬼頭 ろか　彫金／銅、鉄　1353 × 653 × 44mm

AWARDS 学長賞

解 説
「自然の偉大さと温かさ」をテーマとして銅板レリーフを制作した。散歩が好きな私は、道を歩きながら様々な自然現象に触発される。吹き抜けていく風や降り続ける雨、雲を照らす月光、照りつける陽光や雪が降り積もっていく様などである。デザインには風が吹き抜けて通り過ぎていく大気の動きと流れを大きく捉え、その合間を伝え流れていく雨を組み込んで表現した。そしてその自然を包み込む温かさを人の手で象徴的に表現し、作品の中心に配した。

プロセス
心象風景をデザイン化するために何度も描き直し時間を費やした。さらに粘土で実物大にレリーフモデルを制作しながら、全体のバランスを何度も修正した。銅板にデザインを写して砂袋の上で木たがねや撞木槌を使い徐々に高低を作り出した。大まかに形が出来上がってきたら脂台に付けたり剥がしたりしながら鏨を使用し全体を仕上げた。着色は硫化着色をしながら色調を整え、鉄枠にセッティングし額装した。

講 評
感性豊かな自然に対する感情を大きな銅板の打ち出しで表現した優作である。自己の感情を形にする過程で深く悩み考察しデザインを完成させた。平面のデザインを立体にする過程でも粘土原型を前に試行錯誤を重ね自己の考えを形に転換する難しさを学んだ。立体作品を様々な角度から検討し纏める難しさや、初めて挑戦する大きさにも苦心しながらチャレンジした達成感は代え難い経験である。

グルーブ
Jewelry

坂本 陽子　彫金／銀、キュービックジルコニア
26 × 23 × 11mm　他 7 点

解 説
自身の人生において最も思い出深く、印象に残る“思春期”の記憶をリングという形を用いて感覚的に表現した。直線的な地金部分に配置したキュービックジルコニアは、見る人により輝いて見える部分が違う。リングをつける全ての人に、それぞれの“思春期”の記憶と重ね合わせてみてほしいと考えた。リングという形状は実用性の他にも、彫刻的な要素が強く、360 度どの方向から見ても捉えることができ、立体表現をするにあたり最も多くの情報を発信できるものと考え制作した。

Dear my sister's
ティアラ

松永 奈津子　彫金／七宝、シルバー
60 × 230 × 230mm

解 説
身近な2人の姉達をモデルにティアラをイメージして2つのデザインを考え制作した。そのうちの1つ「Orange」のデザインには花言葉が（陽気で優しい）のポピー、（夫婦円満）のユリオプスデージー、（信頼）のマーガレットをモチーフに選び、義姉の明るい人柄や華やかさを暖色系でまとめ、ティアラでは珍しい大ぶりな環状の形で表現した。打ち出しなどの彫金技法で花の形を制作し七宝により色を表現した。

トカイユカイ
Pop up Jewelry

小野 ちひろ　彫金／シルバー、アクリル、真鍮、銀メッキ
170 × 270 × 120mm

解 説
都会の賑やかさがストレスになることが多いが、そんな喧騒をポジティブにとらえ、高層ビルやサラリーマンの多い西新宿をモチーフにジオラマを制作した。その中で特徴的な形の高層ビルはシルバーをはり合わせてペンダントやリングにし、ジオラマの中に隠した。また、土台となる地図をパソコン上で描き、自動彫刻機で刻印した。展示では下から照明をあてアクリルのビル群をより鮮やかにし、高層ビルの窓から光が漏れる様子を表現した。

再会

AWARDS 学長賞

鈴木 ユリア

油彩／パネル　1120 × 1940 (mm)

解 説

大学生活のなかで制作してきた作品の集大成となるものを描きたいという思いがあった。特に思い入れのあるハシビロコウをモチーフに、過去作品の要素を取り入れたものを描いた。「再会」という題目は、この世を去ったものと現代を生きるものとの再会を指すと同時に、上記で述べた過去の作品を見つめ直す、"再開"する、という意味も込めたものである。色のセロファンを重ねたような複雑な色味をつくり、透明感のある作品に仕上げた。

プロセス

作品の主な題材であるハシビロコウの取材の為、動物園や博物館へ足を運び、資料を集めることに多くの時間をかけた。支持体に白亜地を使用し、グレージング等の古典技法を用いて、制作を行った。初めて挑戦する技法であった為、少しずつ形を描き起こしては上から絵具をかけるという工程の繰り返しが、一進一退に思えて、不安を感じることもあったが、最終的に自分の思う深みのある画面に仕上げることが出来た。

講 評

動かない鳥として知られるハシビロコウとその骨格が、はばたき、対峙している。シンメトリーの構図は『再会』というテーマを象徴的に表し、観る者を強く惹きつける。水辺に描かれた花は、それぞれが作品のテーマに繋がる花言葉を有しており、画面にリズムを与えている。作者は多くの取材や画材、技法の研究を重ね、油彩画の重層構造と対象の緻密な描写を活かして深い奥行きのある画面を創り出した。今後の展開にも期待の持てる秀作となった。

隠居

塩野目 南帆

ミクストメディア
h630 × w760 × d340 (mm)

解 説

この作品は「秘密基地」のワクワク感を形にしたものであり、私の幼いころからの制作活動の集大成の意味も込めている。空間としての全体的な雰囲気を大切にしながら仕上げているが、本の一冊、筆の一本から粘土を使って制作し、大きな作品ながらも細部を疎かにしないよう注意を払いながら制作に臨んだ。表と裏で全く違った顔を見せる本作は、どちらから先に見ても、見る者に少しの驚きを与える事を目指して製作した。

ねんねこ

橋本 智子

木彫／楠　h380 × w800 × d1000 (mm)

解 説

アートワークコースに入ってからモチーフを大好きな猫に絞って作品制作をしてきた。学生生活最後の作品制作ということで、2匹の猫を使った空間構成考えて、昔、撮った写真を元に制作をすすめた。床に寝そべって体が潰れている様子を表現するために、お腹のたるみ、膨らみを重視した。表面の仕上げは、小さい鑿で細彫りしてから更に整えて猫特有のシルエットの曲線をだした。

Rouge incertain

蘇 立

油彩／パネル　2900 × 2010 (mm)

解 説

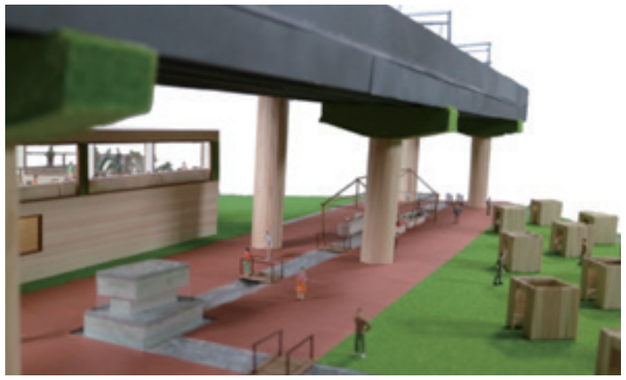
視覚の不安が触覚の連想に繋がるというイメージを油彩で表現した。赤という色は人を不安にさせる性質を持っていると感じるので、具象的な形を用いずに赤い絵具のマチエールだけで構成し制作することにした。不安の表現手法として1つの長方形の画面をグリットで分解して再構成することと、マチエール表現を研究し、油絵具と下地材を混ぜて厚く盛り上げ、観る人が触りたいという触感になることを狙いざらざらしたマチエールで表現した。

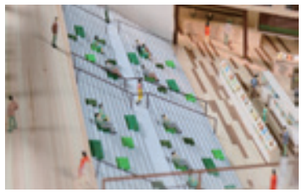
IKOI

北戸田駅高架下活用計画

富田 航平 ［制作］

AWARDS 学長賞





解 説

北戸田駅高架下空間を活用し、人々が体や心を休めることのできる憩いの場として利用できる施設である。高架に沿って図書館とカフェを配置し２階を吹き抜けにしてそれを繋ぐ大階段には、本を読んだりすることのできる居場所を設けた。他にも、疲れを癒すことのできる足湯やイベントスペースなどとしても使える広場を設置した。この IKOI は、優しさや温かさ、落ち着きや安らぎを演出し、幅広い世代の多様な要望に対応できるようにした。

プロセス

現在商業施設などとして活用されている高架下空間がある一方、活用されていない空間も多くあり、暗い、汚いなど悪い印象を持っている人が多いということが分かった。そんな高架下空間の悪い印象を変え、人々とって身近であり気軽に利用できる施設をつくり、地域の活性化に繋がる場を提案しました。高架下空間の施設を提案するにあたり、これまでの高架下空間のイメージを改善し、圧迫感のない開放的な空間になるように計画した。

講 評

現在、鉄道の高架下は様々に活用されるようになったが、北戸田駅では空き地のままである。そのため作者は、高架下周辺に駅利用者や住民も利用しやすく、地域の活性化にも繋がる施設を「癒し」をメインテーマに計画した。この作品の、暗く冷たい雰囲気の場所を木材や自然を取り入れて、温かく落ち着く居場所にデザインした点を評価した。また作者の計画的な研究姿勢からもたらされた丁寧な造り込みによる完成度の高い作品は秀逸である。

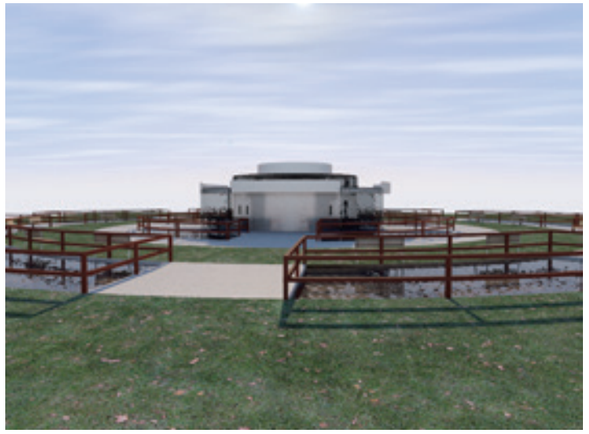
UNDER PARK

新宿中央公園地下活用計画

宇津木 侑樹 ［制作］

解 説

UNDER PARK は直径50mの円筒形の建築物で、地上に入り口があり、地下10階建ての施設となっている。上から、地下公園、体育館、飲食、栽培、情報資料、作業室、多目的、ジム大浴場、備蓄となる。UNDER PARK を利用することで、休憩・運動・作業スペースの確保や、多くの情報取得の場となり、施設全体が様々なコミュニティーを生み出す。UNDER PARK は新宿中央公園のシンボルとなり、新宿を利用する多くの人々の夢を叶えていく。



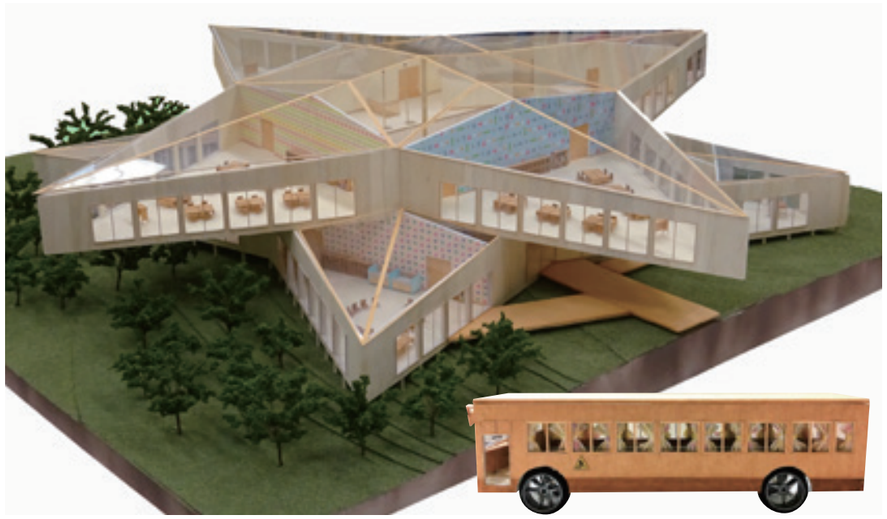
ぼくたちの庭。

五感を刺激するモバイルこども園

小林 史佳 ［制作］

解 説

「感性を磨く」＝「五感を刺激する」＝「自然と触れ合う」という研究結果から、横浜市旭区にある緑豊かな「こども自然公園」を舞台とした。この公園で、自然を身近に、そして自然と一体になれる環境づくりを行う。通園にはこども自然公園の最寄りの鉄道から「こども園電車」を走らせ、園舎の最寄り駅にて電車からバスへトランスフォームさせる。このトレインバスも1つの教室として展開する「移動式認定こども園」である。

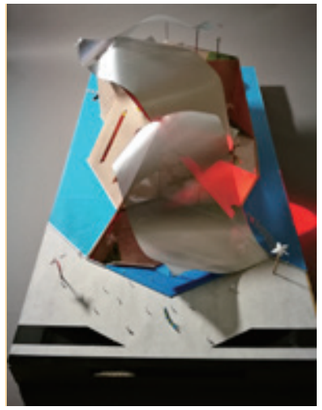


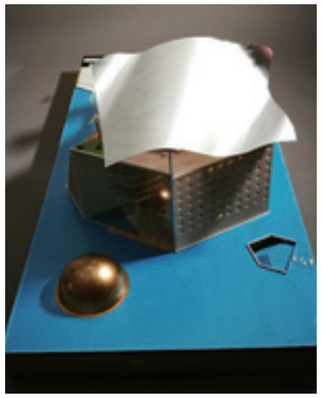
TRANCE ISLAM

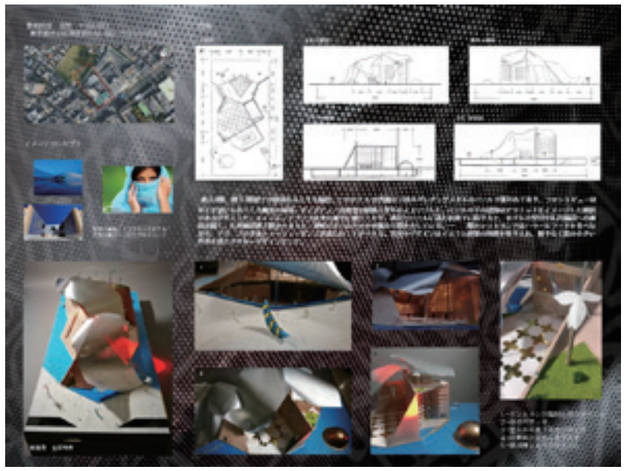
イスラミックなホテルの提案と文化の共有

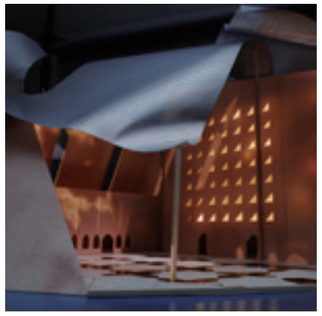
村上 友介 ［制作］

AWARDS 学長賞









解 説

「イスラム」にマイナスのイメージを持つ人は多い。しかしイスラム文化の精神や衣食住など素晴らしいところは見落とされがちだ。イスラムの文化に五感で触れ、イスラム文化を多角的に共有できるホテルを提案する。外観はおとぎ話にも出てくる魔法の絨毯や女性のベール、砂漠の景色、ベールの下の建物はピラミッドのイメージ等を随所にデザインした。イスラム文化の発信拠点として、イスラム文化の芳醇な魅力を知ってもらう文化的宿泊施設。

プロセス

イスラム文化圏に長く住んだ経験のある私だからこそ表現できる空間の魅力があると考えた。イスラム教徒が安心して利用できる場であると同時に、非イスラム教徒がイスラム文化への理解を深め、五感すべてで体験出来る空間を.砂丘に出向き、モスクに佇み.スタディ模型やイメージシートやスケッチ等を通じて何度も考えた。近代建築でありながら、古き良きイスラムの伝統を感じ、世界の人々に共感を得られるホテルを目指した。

講 評

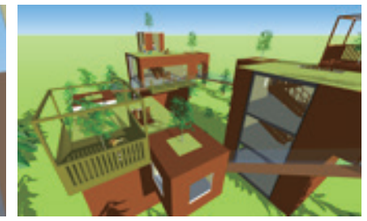
政治が解決出来ない問題を、デザインで解決できるのか?と言うチャレンジングなテーマである。イスラム文化はベールに包まれている。自身がイスラム文化圏で暮らし、肌で感じた記憶をベースにデザイン。パンチングメタルのベールを纏い夕闇の水に浮かぶこのホテルは、妖しくも魅力あるオーラを発している。貴方のイスラム文化は、このホテルに滞在し、ハラル食を食べ、広場で音楽を聞き語りあう時、ゆっくりと崩壊し、共鳴していくかもしれない。

Forest House

街にある子どもの遊び場　**石川 鉄朗**　［制作］

解 説

外で遊ぶ機会が少ない子どもの遊び心をくすぐるツリーハウスのような建物。敷地は東京の森林への注目度が高い港区。木の幹をイメージした３棟の長方形から、枝や葉っぱが伸びていくように遊具や休憩所にたどり着く。自分の足で駆け上ってもらうために高さ 10m と 6.5m の棟を組み合わせ、遊具で上階へ行くことも可能。中の様子も見える様に心がけた。渡り廊下を多数設け、行き来しにくい不便さで飽きさせず、自然に体を使って脳への刺激になることを想定した立体公園である。

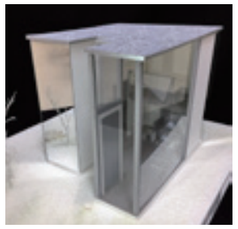


忘却という癒し

山田 祥之　［制作］

解 説

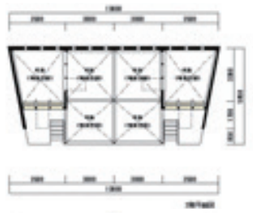
脱日常を体験して癒しを感じるということは、人間が日常を忘却し、リラックスしている状態である。この宿泊施設は、自然と人間が密接に関わり,そこから生まれる安心や睡眠をとることで,穏やかな時間を過ごせる場所である。建物は,宿泊棟6棟、SPA 棟、レストラン棟の 8 棟から構成され、それぞれ自然との一体感を感じるデザインになっている。この宿泊施設はできるだけ人を感じることがないように少人数制の利用を設定している。

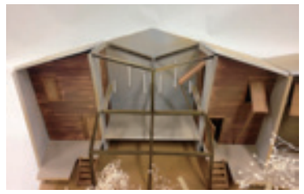


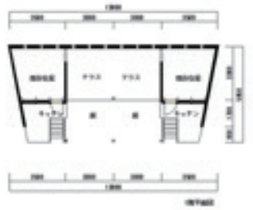
ミャンマー都市部におけるスラム街の改善計画

PYAE PHYO KYAW ［制作］

AWARDS 学長賞







解説・プロセス

塀は､単に敷地を区分する壁としてだけでなく､視界の遮断や､防犯､防火､防音などの役割をもつ。ミャンマー政府は、投資家らと結託しスラム街を破壊しその跡地に工場を誘致する計画を立てているが、工場に防犯上設置される塀に従前居住者であるスラムの住宅を寄生させ、スラム街を再生することを考えた。住宅と共存する塀の形状は、「人間の生命を守る」「気持ちが落ち着く」「思い出が詰まっている」という思いを込めて家形の五角形とした。それらが工場周辺を連続して囲むと、家々が連なる街のような風景が生まれる。そこには、住宅だけでなく学校や医療センターなどの公共施設も配置した。五角形の塀の１スパンには２軒分の住宅が設置される。１住戸の半分（スパン両端）はコンクリートと木材で覆われた小さな住宅が造られるが、もう半分（スパン中央部）には鉄骨のフレームのみを設置し、居住者が既存の壁やフレームを利用して自分たちで増築できるようにデザインした。人々は、生活が豊かになるに従い様々な現地の素材を使って増築を試み、街並みはさらに彩りを増すこととなる。さらに、長い年月をかけてスラムの人々の生活が向上しライフスタイルが変化する中で、豊かな将来像を描くことができる。最後にこの提案は、ミャンマーが発展していく中で、いつかスラムという言葉そのものが無くなる命ある建築になるのではないかと思う。

講評

今後の経済発展が期待されるミャンマーは、富める者と貧しい者の格差がますます広がっていくことが懸念される。その問題に対し、最も貧しい層となるスラム住民のために安心で安全で衛生的な住まいと社会を、政府の先進国の工場誘致政策を利用して提案しているところが興味深い。工場の塀を住宅の構造体として利用する合理性や将来的に住民自らの手によって行われる増改築を想定した計画、発展に伴い失われがちな自国の伝統や風習を継続していくデザインの建築と風景に好感を持った。

屏風にうつる暮らしの瞬間

芝園団地再生計画

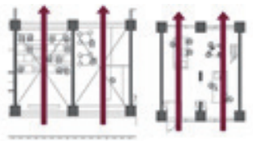
佐藤 麻衣 ［制作］

解説

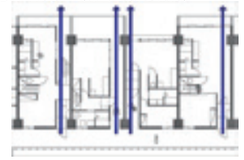
芝園団地は長さが約500m続く15階建ての巨大な防音壁を担う建物である。分厚い存在感のある印象を軽減するために、建物全体と個々の住戸に「抜け」を造った。以前は閉鎖的な住戸空間であったが、団地の外側と内側から、間接的に互いを知る機会ができ、多様な世代と文化間の交流を図る。ファサードは線路側を木の格子で作ることで温かみを出し、外から見える抜けを強調した。反対側では凹凸をつけることでリズムをつけ表情を出した。

パッサージュ

●パッサージュ（共有部分の抜け）



●ギャルリー（専有部分の抜け）



ギャルリー

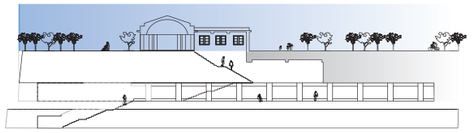
地下の明路

新しい地下空間の活用方法

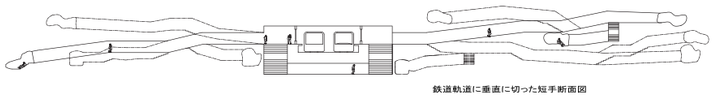
金山 智子 ［制作］

解説

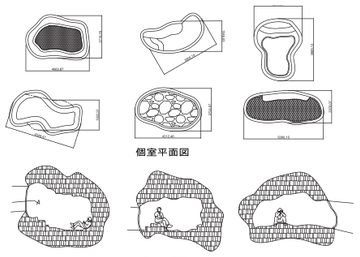
地下空間の役割は､身を守るシェルターから娯楽スペースとしての役割に変化しつつある。地下がもつ､「何かに制約されない自由さ」「静寂」「他者を感じない」「情報が入り込まない」という東京の地上にない空間に身を置くことで、人々が孤立した時間を過ごせ、さらに自身の存在を保てる空間を提案した。廃地下鉄駅を再活用し、３次元的に蛇行する道や個室、電車と連動した光や音で景色が変わる地下歩行空間などの異世界を演出した。



鉄道軌道に平行に切った長手断面図

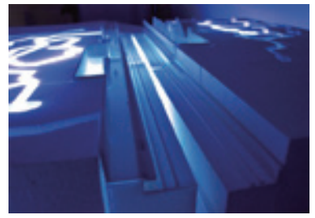


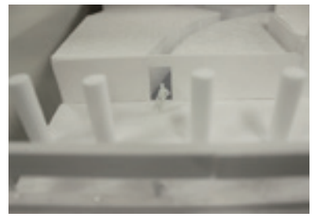
鉄道軌道に垂直に切った短手断面図



個室平面図

個室断面図



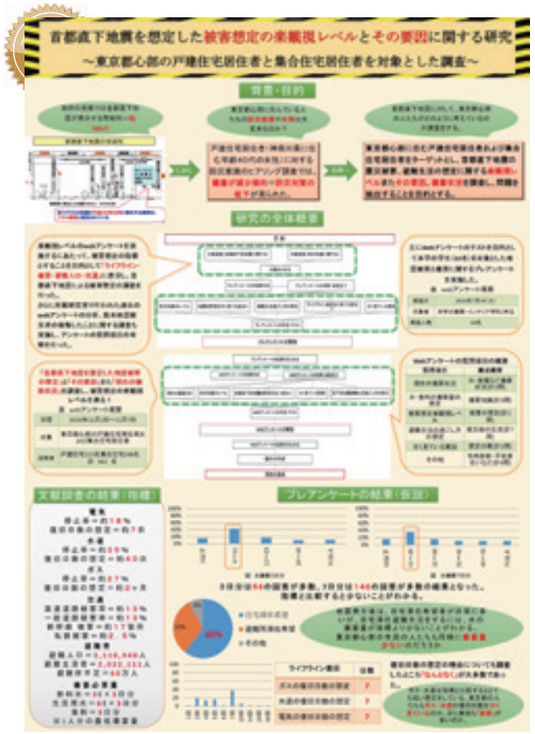


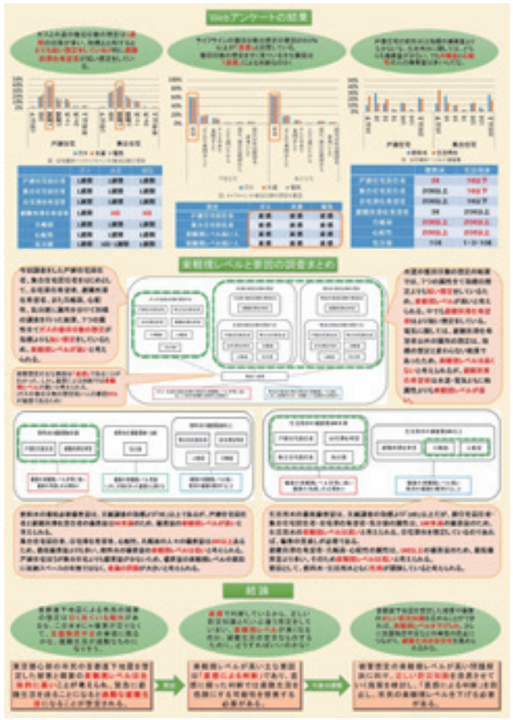
AWARDS 学長賞

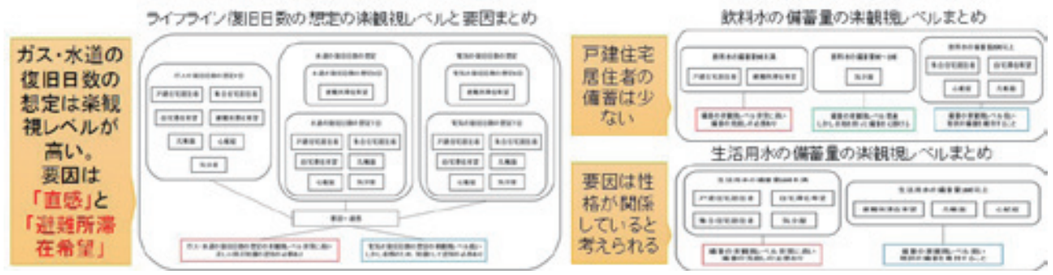
首都直下地震を想定した被害想定の楽観視レベルとその要因に関する研究

東京都心在住の戸建住宅居住者と集合住宅居住者を対象とした調査

清水 寛仁 ［論文］







解 説

首都直下地震を想定した市民の被害想定の楽観視レベルと要因、備蓄状況を把握し、問題の抽出を目的とし調査した。市民のガスと水道の復旧日数の想定は、政府の見解より非常に短い想定をしていた。主な要因は「直感による判断」と考えられる。さらに水の備蓄、特に生活用水が少ないことがわかった。結果として被害想定の楽観視レベルは高いことがわかった。そのため正しい防災知識を啓発し、市民の楽観視レベルを下げる必要がある。

プロセス

政府は首都直下地震が発生する可能性は約 70％と発表している。東京都心部に住む市民は過酷な避難生活を送る可能性が高く、事前の防災対策は必須であるが、備蓄は減少傾向にあり、防災対策の低下が見られた。そのため、東京都心部に住む 461 人を対象とした web アンケート調査を実施し、詳細な分析を行った。防災意識だけでなく、個人の性格も含めた考察により、首都直下地震を想定した被害想定の楽観視レベルとその要因の分析を行った。

講 評

今後の首都圏が直面する災害後の市民の避難生活という大きな課題を含む内容をテーマにした論文である。備蓄等の備えが十分でない要因の究明の調査手法の検討、具体的な調査計画、仮説の検証方法の検討、既往研究の成果を詳しく分析するなど、本調査の前準備も詳細に実施した。また戸建住宅と集合住宅の居住者を対象に調査を実施し、住まいの違いによる比較も行った。一年間、継続して粘り強い研究姿勢で取り組んだ点も評価できる。

Choice

中間領域が創る住まい

横山 瑞穂 ［制作］

解 説

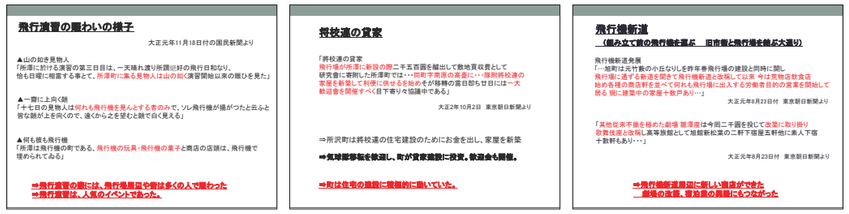
経年変化に対応し住宅そのものを暮らしに合わせて変形させる住まいを提案した。その仕組みは、1.6 mグリットに配置された柱間にパネル状の壁を建て箱状の部屋を構成する。住人は自分のエリア内に大きさの異なる複数の箱を持ち、各部屋は必ず周囲を通路で囲まれている。部屋が独立しパネル移動が可能なことにより、部屋の用途変更や住居面積の増減を柔軟に行うことができる。通路は部屋同士の繋がりや半屋外の空間として魅力的な場となる。

戦前における所沢飛行場と地域の関わりについて

羽生 安莉奈 ［論文］

解 説

明治 44 年に日本初の飛行場として開設された所沢飛行場について当時の新聞記事から人々の飛行場に対する見方や街の変化を読み取った。飛行場の開設は当初から歓迎され、飛行演習等のイベントが多くの見物客を集めて町の経済に貢献した。そのため、地域と飛行場の関係は、町が将校向の貸家新設を進めるなど終始良好だった。また、組立て前の機体を運ぶ新道敷設が商店新設や花柳街、宿泊業の興隆に影響する等、新市街の形成に繋がったことが明らかになった。



●学生の受賞

第 45 回伝統工芸日本金工展 21+ 部門

入選　眞舩 彩（ジュエリー・メタルワークコース 4 年）
入選　鬼頭 ろか（ジュエリー・メタルワークコース 4 年）
入選　鈴木 沙織（ジュエリー・メタルワークコース 2016 年 3 月卒業）

鬼頭作品

眞舩作品

第 50 回日本七宝作家協会展

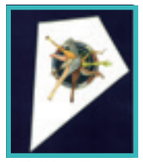
奨励賞
田島 さと子
（ジュエリー・メタルワーク
コース 2016 年 3 月卒業）

第 10 回宇和島パールデザインコンテスト

入選　海老澤 風花（ジュエリー・メタルワークコース 3 年）
入選　白石 佳奈（ジュエリー・メタルワークコース 3 年）
入選　高橋 亜希子（ジュエリー・メタルワークコース 3 年）
入選　沼崎 ちさと（ジュエリー・メタルワークコース 3 年）
入選　松岡 奈穂（ジュエリー・メタルワークコース 3 年）
入選　齋藤 晏奈（アートワークコース 3 年）

白石デザイン画

沼崎デザイン画


高橋デザイン画

第 71 回 新匠工芸会展 東京都美術館（10 月）、京都市美術館（11 月）

染織部門 入選　北田 梓（テキスタイルワーク ⅡA, ⅡB 履修）

宮染め てぬぐいデザインコンペ

（宇都宮ろまんちっく村、9 月）
入賞　土屋 咲央里（テキスタイルワークコース 4 年）
入賞　吉永 藍（映像クリエーションコース 3 年）

新宿大ガード ウォールギャラリー制作（9 月）

テーマ：新宿の未来
笈川 碧（デザイン・造形学科 1 年）
増田 美礼（グラフィック・プロダクトデザインコース 3 年）
太田 悠紀、小川 美穂、嘉戸 瞳、北村 仁美、小林 希、竹内 由香、
村上 未奈（テキスタイルワークコース 3 年）、
綾部 嘉美（テキスタイルワークIA, IB 履修）
桑江 涼、田中 怜菜（アートワークコース 3 年）
青木 寛和（インテリアデザインコース2 3 年）

東京ネクタイ協同組合とのコラボレーション企画

ネクタイコラボレーション展（11 月）

最優秀賞 デコタイ部門　栗田 満理奈（デザイン・造形学科 1 年）
デコタイ部門「JAPAN CULTURE APPEAL」
優秀賞　土屋 咲央里（テキスタイルワークコース 4 年）
佳作　小島 恵美利（テキスタイルワークコース 3 年）
佳作　小川 美穂（テキスタイルワークコース 3 年）
佳作　太田 悠紀（テキスタイルワークコース 3 年）
染めタイ部門「未来の東京」
優秀賞　齊藤 星奈（テキスタイルワークコース 4 年）
佳作　小島 恵美利（テキスタイルワークコース 3 年）
佳作　綾部 嘉美（テキスタイルワーク IA, IB 履修）
デザイン画部門「東京オリンピック開会式ユニフォームネクタイ」
優秀賞　小倉 未久（デザイン造形学科 1 年）
佳作　永井 みさき（デザイン造形学科 1 年）
佳作　塚田 梨花子（デザイン造形学科 1 年）

インテリアプランニングコンペ 2016 「シェアするインテリア」

建築・インテリア学科インテリアデザインコース 3 年生の必修科目「インテリアデザイン演習Ⅱ b」（担当：山本達雄非常勤講師／コーディネート：横山稔教授）で取り組んだ、日本インテリアプランナー協会主催「インテリアプランニングコンペ 2016」に、学生 3 名が入選、さらに最終審査において 1 名が<日本インテリアプランナー協会賞>を受賞しました。

インテリアプランナー協会賞
咸（ハム） 娜リン
（建築・インテリア学科
インテリアデザインコース 3 年）

咸さん

入選　海老澤 優衣
（建築・インテリア学科
インテリアデザインコース 3 年）
入選　河野 舞
（建築・インテリア学科
インテリアデザインコース 3 年）

『インテリアプランニングベスト
セレクション 2016』／丸善プラネット

コンペのテーマは「シェアするインテリア」で、6 m角のスペース内にコンセプトを可視化して模型とボードで提案するもの。全国 357 点の応募の中から 45 点の作品が入選し、11/5（土）に行われた最終審査（「IPEC2016」会場／於:工学院大学）では、模型作品の展示とともに一人ひとりが 90 秒のプレゼンに臨み、審査の結果、ベスト 10 に選ばれた咸さんは<日本インテリアプランナー協会賞>を受賞・表彰されました。
右記の大学の HP に入賞作品がアップしてあります。　http://bwu.bunka.ac.jp/info/2016/11/3432

なお、咸さんの作品は、2017 年 1 月発刊の『インテリアプランニングベストセレクション 2016』にプロフェッショナルの受賞作品と共に掲載されています。

BUNKA ZOUKEI

編集後記

造形学部年間教育活動報告集「BZ」も発刊から5年目を迎え、今年は構成およびデザインを一新いたしました。「プレゼンフォーラム」や「学外連携」など社会とかかわる実践的な課題に取り組む学生たちの生き生きとした姿、日頃の成果の集大成としての「卒業研究優秀作品」や学外コンペに真摯に取り組む姿をご覧いただければ幸いです。

今後とも文化学園大学造形学部の教育活動をご支援くださいますようお願い申し上げますとともに、この場をお借りして、ご協力いただいた皆様、また冊子の作成にあたりお力添えをいただいた編集デザイナーの廣田氏に心からの謝意を表します。

造形学部年間教育活動報告集編集委員
谷口久美子

文化学園大学　造形学部年間教育活動報告集 2016

● 造形学部専任教員
安高信一　浅沼由紀　荒井知恵　井上揺子
岩塚一恵　大関徹　岡部隆信　岡本泰子
押山元子　角谷彩子　嘉松聡　加茂幸子
近藤静香　鳥海薫　北岡竜行　佐藤百合子
澤田志功　七里真代　柴田眞美　庄司喜久美
白井信　曽根里子　高橋正樹　谷口久美子
長山洋子　成井美穂　春田幸彦　昼間行雄
久木章江　深田雅子　星野茂樹　堀尾眞紀子
牧野昇　松田純子　丸茂みゆき　松村由樹子
安野彰　山﨑裕子　横山稔　渡邉秀俊
渡邉裕子

● 造形学部年間教育活動報告集
編集委員
谷口久美子　庄司喜久美
嘉松聡　安野彰
成井美穂　長山洋子
星野茂樹

● 写真提供
林敦彦　三守敬次　鈴木義明
土田祐介　アイキ元

● デザイン　hirotaS ／ 廣田武志

● 発行：2017 年 3 月 11 日
● 発行者：文化学園大学造形学部
堀尾眞紀子

〒 151-8523　東京都渋谷区代々木 3-22-1
TEL. 03-3299-2310 FAX. 03-3370-6202
http://bwu.bunka.ac.jp

※本誌に掲載されている作品・写真等の無断利用、複製を禁じます。

文化学園大学

造形学部　デザイン・造形学科　建築・インテリア学科

〒151-8523　東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL. 03-3299-2302（造形学部長室）
http://bwu.bunka.ac.jp/index.php